



116
A 4426



414
A 4426



覺書 第二十二号

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

方今日論ハ所ノ遠証之人數ヲ編成スル最良ノ
方法ニ付キ予カ見込陳述スルニ先ツ日本政
府ハ何ヨルモサレ島土人之中ニテ平服セント欲
スル者ハ之ヲ懐ケ抗敵セントスル者ハ之ヲ壓
制シテ竟ニ總テノ土人ヲ開化ロシノ鎮定ノ後
其土人ヲシテ己レ等ト日本政府トノ為メニ有
益ナラシムルニ着眼ス可ク

此處ニ此方法ハ諸
論說皆同レクニ

下記し有之其次ニ書經ノ文ヲ抄出致シ在假トモ
原文ニ漢字ヲ記スルヲ以テ別段社ニ不申候
謹白 又彼地ニ到ルニ於テハ支那人又ハ其他
ノ外國人ノ妬猜ノ念ヲ起シテ竊カニ我處為シ
妨クル事ナカラシムルニ極メテ注意ニ且遠征ノ
真ノ眼目ハ土人ノ所轄タルコソモ其島ノ一
一部ヲ日本ニ併ハスニアレモ其表向ノ眼目ハ唯
僅カニホシタシレ人ノ罪ヲ問ヒ後未更ニ其惡業
ヲ行フヲ防制スル為メナリト為スニ着眼ス可
シ○右ノ目的ヲ成就スルニハ左ノ諸件ヲ必要
トス

第一 支那人ニ可ホシセ^{字体判然ト} 碇泊場
封港スルヲ頼ム可シ但シ此碇泊場ハホシタシ
領地ノ北西ノ部分ニ在リテ支那管轄ノ地内ナ
リ

第二 我國ニ於テホシタシレノ真西ニ方リヨヤラ
口^{字体判然ト} 致シ不申候ヨリコレヤリアス^{断ニ至ル迄長サ十}
五里許ノ地ニ在ル小船ヲ碇泊ス可キ四箇ノ港口ヲ
三十人ヅノ小分隊ヲ以テ封港シ且之ニ占據
ス可シ但シ^其港口ハ支那ノ所領ナリト懸ヘル
地ノ外邊ニ在リ

第三

チユイラソックス

字体判然と致し不申候

人ノ酋長ノ

統制スル土人並ニ東海岸ノコラヤ人種ト談

判シ我カボインタシ人^征征服スルニ方リ我ヲ助

ケテ道案内者及ヒ援兵ヲ差出リシム可シ

第四 或ハ兵力ヲ用ヒ或ハ土人ト談判シテ曰

ヤレアシヨリ北緯二十四度三十三分許ノ處ニ

在ル東海岸ノ一岬^至迄未タ他國人ノ所轄

スラサル土人ノ海岸ニ兵士植民地ヲ設ケテ

之ニ占據ス可シ

右等ノ事ヲ為シ終リテボインタシ人ヲ征服シ又

ハ其降ヲ告ケタル後日本政府ヲシルモサ島

ヲ靖寧ニ為スニハ一箇ノ開化國ノ之ニ占據スル

ニ必要ニシテ今他ニ之ヲ占領スル國ナク幸

ヒ日本ノ兵其地ニ在ルカ故ニ其兵ヲ此所ニ

留メ置ル可キ旨ヲ公告シ且全世界ノ利益ノ

為メコラヤルモサ島中土人ノ領スル地ハ日本帝

國ニ之ヲ併ハスル旨ヲ公告ス可シ而シテ又遠

征ノ軍ヲ編成スルニ付キ左ノ諸件ニ注意ス可シ

第一 着眼ト為ス所ノ談判ハ成ルベキ之ヲ

為シ遂ケ無益ニ血ヲ流スノ憂ナカレム可シ

第二土人中ノ或人種ヲ征スル陸海軍ノ處為
及ヒ植民地ヲ設クル前ニ為ス可キ測量家數
等ハ極メテ迅速ニシテ且ツ巧ミニ之ヲ取行フ
可ク又兵士植民地ヲ設クル場所モ適宜ノ地ヲ
擇ミ新領ノ地ニ於ケル内外ノ寇ヲ防クニ備ヘ且
土人中ニ利益アル労働工業ノ道ヲ開クニ着眼
ス可シ

第三土人ニ相當ノ開化ヲ授ケ且右島ヲ併ハ
セタル後其人種ニ適シタル政法ヲ設ケ定ム
可シ

右各種ノ公務ヲシテ互ニ抵觸スルヲナク速ク
ニ其功ヲ奏セシムルヲ得ニハ其各種ノ公務
ニ總括スル長官一名ヲ置ク可ク此長官ハ幾ニ
ト無上ノ權柄ヲ任セラルル最上委員ニシテ
日本ヨリ兵ヲ出ス前ニ皇帝政府ヨリ授ケラレ
タル詳細ナル差圖書ニ依リ其權柄ヲ行フ可シ
蓋シ此長官命令ヲ發出スルニ方リ有害ノ狐疑
ナク適宜ニ其職任ヲ行フ為メニハアラルモサ
島十土人ノ領スル地及ヒ其人種並ニ其那又
ハ其他ノ外國トノ方今接際ノ模様ヲ守管スル

諸事ヲ詳細ニ知得セサル可カラサル一因ヨリ
論タルヲ待タサル所ナリ然レモ余ハ知ル所ニ
ラハアラルモサ嶋中主人ノ領スル地ハ未ダ特
ニ之ヲ推究穿鑿セシ者一人トシラアルコトナク
又「タイワン」ト題スル書ヲ除クノ外ハ亦今
未ダ「フアルモサ」島ノ事ヲ記スル完全ノ書アル
コトナク而シテ此「タイワン」ト題スル書ト虫モ
此嶋ノ土人及ヒ其住スル土地ノ事ニ付テハ無
根ノ詐言ヲ編輯シタルモノニ過キサルカ故ニ
已ムヲ得ス竝上委員ノ輔依トシテ彼地南部ノ

模様ト其人ノ民トヲ自カラ熟知シタル者ヲ任シ
テ其次官ト為ス可ク而シテ其次官ハ特ニ右土
地ノ事情ヲ知りタルニ由リ自カラ支那ノ地方
官吏又ハ外國領事又ハ土人ノ酋長ト應接スル
等ノ諸事ニ付キ能ク其職任ヲ成就セシトスル
為メ殊ニ其處為ノ初メ一於テハ長官ヨリ時宜
ニ應シテ委任セラレタル事務執行ノ様相ヲ有
セサル可カラスシテ唯僅カニ長官ニ助言スル
ノミヲ以テ其職務ト為ス可カラサルナリ。○
シ長官ト次官ト遠征ノ所為ヲ行フ方途ニ付キ

互ニ其説ノ合セサルコトアルハ政府ノ差
圖書ニ據テ其争ヲ決定スヘク若シ又其相圖
ノ文意ヲ解釋スルニ付キ長官ト次官ト争アル
ハ海陸軍ノ指揮官長官ノ説ヲ是ト爲セハ長
官ノ説ニ決スヘク然レハ次官其長官ノ説ノ
如ク執行ヲ爲メカヲ益クシテ勉勵スヘシ但シ
右ノ方法ヲ設クルハ次官何時ニテモ其見込
ヲ申述フルノ特権ヲ有シ又長官ハ縱令次官ノ
助言ヲ用ヒスレバ己レノ意ニ任カセテ勝手ニ其
助言ヲ聞カサルヲ得サルヘシ

「ゼ子ラール」官一員陸軍ヲ指揮ス可ク相當ノ海
軍士官一員海軍ヲ指揮ス可シ「リユウ」ナント
「ゴッソ」ハ陸軍少帥附士官ノ中ニ加ヘテ工兵
ノ長ト爲ス可シ而シテ此人ハ間々敵ノ彈丸飛
行スル處ニ至リ堡砦ヲ築ク可キ事アルカ故ニ
「リユウ」ナント、コロ子ハ「謀略」ノ等ヲ與ヘ且
其等ニ相當ナル權柄ト尊敬トヲ授ク可シ蓋シ
「マジヨル」ゼ子ラールノ指揮ヲ受ケテ右様ノ職
務ヲ行フ士官ハコロ子ルノ等級ヲ承
テラサルカ故ニ同人ニ「リユウ」ナ
者稀
子

此ノ等ヲ典フル氏其等故テ高キニ
稱ニ可カラズ又同人ノ給料及ヒ手管
政府トノ間ニアル方今ノ條約書ニ循ヒ同人ノ
得可キ權アル金高ヨリ更ニ少ナキヲナタル可
シ但シ同人ハ其本國ニ在サル國ノ為メ其生命
危難ノ場所ニ赴クヲ往ク之レアル可ク且方今
開拓使トノ條約ニ依レハ斯クノ如キノ職務ヲ
為スニ及ハサルハ故ニ右ノ諸件ヲ定ムル氏甚
テ理ニ適シテ宜シキヲ得タルモノナリト稱ス
ルノ外他ナクル可シ

抑皇帝政府ノ外國人ニ等級ヲ典フルラ極
テ好マサルハ予ノ熟知スル所ニシテ其道理
ハ予々嘗テ及譯セシメシ神道ノ一書ニ據テ
明白ナリ其書中ニ曰ク且ソ我邦ハ昔ヨリ諸
ノ事物ヲ万国ニ採ラテ用フルトハ猶貴人
高位ノ人ノ身自ラ一切ノ事物ヲ管作スル
ヲナク唯臣下庶民ニ命シテ之ヲ造ラシメ之
ヲ採ラ用フル如ク又視聽言動等ノ機會ヲ為
ス耳目口鼻等ノ頭上ニ在ラ下胸腹
本トナルカ如ク我邦國体ノ大ニ

ル所以ナリト然レ氏此説ハ既ニ
説タル可クシラ若シ外國人ヲ用
臣隸ト為シ且極ノラ下等卑賤ナルヲ知ル可
キ方法ヲ以テムル時ハ外國人断然ハシラ其
職ニ即クテ肯セサル可キモ日本人ノ及ト為
シ日本人ノ同等ト為シラ之ヲ用ヒントスレ
時ハ氣骨アル外國人ト至モ散テ其職ニ即
テ辭セサル可シ備又世界大國ノ史乘ニ就キ
以テ之ヲ看一時ハ大ニ万国ノ材幹ヲ招キテ
最モ自國政府ノ資益ヲ為サシメシ者ヲ以テ

最モ盛大ノ國トス今試ミニ之ヲ例スルニ以
太利人「リッ」ナル者ハ千五百三十二年ヨリ
二十八年間支那皇帝「チント」ヨリ賜ハリタ
ル北京ノ家屋ニ於テ其職ヲ勤メ又「コロ」
府ノ「アダムシヤール」云ハルハ千六百五
十三年數学校ノ教頭トナリテ「波斯」國皇學者
「格」シ又「グマ」ル「ヂ」及「カ」ル「レ」リノ兩氏ハ
支那皇帝ヨリ位階恩澤ヲ賜ハリ又方今佛蘭
西ハ其高名人物中ニ外國人ノ多ク西
ヲ除クノ外他ニ其比類ナク近年日

こし時以太利人「カリフォルニア」陸軍高等
級ヲ典へ又米利堅ニ於テモ南北部戦時
外國人ノ北部陸軍ニ入りテ高級ヲ得三者亦
寡ナカラス因テ想フニ万国上帝ノ法律ニ循
ヒ兄弟タルノ禮儀ヲ以テ互ニ相交ハルニハ
若シ外國人我國ノ為ニ有益ノ者ニシテ其人
亦来テ其職ニ任セント欲セハ我須ラク之
為シテ其人ヲ迎へ過ス可ク臣隷ト為シテ之
ヲ過ス可カラサルナリ

又「カピテイン」「カツセル」ハ島ノ東所ニ兵士植民
地ヲ設クルニ適宜ナル場所ヲ擇ムノ任ヲ蒙ラ
シムヘキ人物ヲシテ此ハ其新タナル職ニ任
スルニ方リ其方今米國ニ於テ有スル等級
ノ世界各國ノ海軍ヨリ受クヘキト同様ノ尊敬
ヲ日本士臣仲間ヨリ受クヘク又同人ハ異議
ナク予ク附属士官トナリテ予ノ指令ヲ受クヘ
キカ故ニ予最上委員ノ命ヲ傳ヘテ同人ヲ指揮
スヘシ但同人ヲシテ其職務ヲ行ハシムル為
ニハ日本ノ海軍士官ノ条紐ミタル船中艘ノ此

人ニ任カセ其船將同人ノ求メニ應シテ其船ヲ
運轉スヘク又兵士植民地ノ為メ澤ニ定メタル
場處ニ上陸スヘキ為メ右船ニ載セタル陸軍ノ
士官等亦同人ノ求メニ循フヘシ而シテ同人ノ
求ムル處ハ曰本士官必スコレニ循ハサルハ大
ラスト雖モ曰本士官ハカツセル氏ノ指揮ヲ受
クルモノナリト云フ可カラズ是レ同人ハ弟ノ
委員ノ令ヲ傳ヘテ右等ノ求メヲ為スニ因リ曰
本士官ハ即チ身上委員ノ指揮ヲ受クルカ故ト
リ又「カピテイニ」カツセルハ米國ニ於ケル其名

聲及ヒ等級共ニ「リ、ユウテナント」ワットソニ上
ニ出テ且一ヶ年間日本政府ニ事フルハ米國海
軍ニ於ケル進級等ノ大益ヲ失フコトアルカ故ニ
予カ思フ所ニテハ同人ヲ給料ヲ「リユウテナ
ト」ワットソニヨリモ一ヶ年一千弗多カクシ、又
出陣中ハ之ニ准シテ其手當ヲモ亦多カクシハ
ルモ毫モ不_レニハアラサルハシ
又予ニ付テハ予嘗テ東京ヲ去テ北京ニ在リシ
時ト同様ノ給料及ヒ手當ヲ以テ十分満足ス可
ク唯予カ求ムル所ハ善ク日本通譯官ニ名_レ及ヒ

支那通辨官一名ト外國書記官一名トヲ政府ヨ
リ予ニ貸スヲニアリテ予ハ此等ノ人々ヲシテ
不断其職ニ從事セシメ且常ニ予ト親マシメテ
其業ニ熟練セシメント欲スルカ故ニ此等ノ人
々ハ他ノ事業ヲ行フトナク專ラ予ニ附屬スヘ
シ蓋シ予カ多年ノ經驗ニ因テ知ル所ニテハ通
辨官及ヒ書記官ヲ常ニ己レノ側ニ在ラシムル
時ハ此等ノ者終ニ其長ト心ヲ同ウシ其長ノ為
メ事ヲ為スニ方リ極テ迅速巧妙ニ之ヲ為スニ
至ルハシ又予ハ日本通辨官ノ給料幾許タル可

キヤヲ知ラスト雖モ支那通辨官ノ給料ハ一ヶ月
五十弗乃至七十五弗ヨリ多キニ及ハサル可ク
其外賄料ハ一ヶ月二十五弗ニ過キサル可シ又
外國書記官ノ給料ハ一ヶ月百五十弗ヨリ多ス
ルサル可ク予當ハ之ニ准ズ可シ但シ外國書記
官一名ハ實ニ缺ク可カラサル者ニシテ嘗テ今
回ノ遠征ト略ト同様ノ所業ヲ行ヒニ時予常ニ
其必要ナルヲ經驗シテ必ス書記官一名ヲ用ヒ
シカ千八百六十七年ニハ兩名迄モ用ヒタリ
又陸軍ノ「ドクトル」マンソンハ東海峽ノ土人

用フル支那語土音ニ通ラルカ故ニ此ノ月
ル時ニ最上委員ヲ為メニモカビテイニカツセ
ル並ニ予カ為メニモ其益量ル可カラサル可シ
政府台計策ヲ採用セハ成ル可キ丈急速ニ遠征
ノ人数ヲ編成スルニ取掛ル可ク其編成終
ルヤ否日本ヨリ兵ヲ出ス前ニ最上委員自カラ
指令シテ必要ナル諸ノ支度ヲ委細ニ整頓ス
可ク但シ其支度ヲ整頓スルニハ各人皆其所長
ニ從ヒ勉勵シテ總テノ用意ヲ成就スルヲ助ケ
其用意不殘成就シタルニ及ニテ兵ヲ出ス可シ

而シテ若シ本年中ニ何程カ事ヲ成サント欲セ
ハ遅クモ三月ノ末迄ニハ出立ス可ク然ラサレハ
十一月ニ至テ氣候寒冷トナリ且「フヲルモサ海
ニ北東ノ「モシ」風ノ吹き来ル前ニ一ノ著シキ
事業ヲ成就スルヲ能ハサル可シ
予カ前文ニ述ヘシ如ク諸ノ支度ヲ整頓スル
ニ懇切ニ意ヲ用ヒ且人数ヲ編成ヲ為シ終リテ
本月ノ末ニ出立セハ予思ヘラク五月ノ末迄ニ
ハ遠征ノ一分隊「ヤリマス」ニ駐ト居ヲ定メ且
東海岬ニ於ケル三ヶ所ノ地ニ占據スルヲ得テ

若シ己ムヲ得サレハ十一月ニ「ボニタ」人ヲ討
テ間ニナク「アラ」ルモサ「フ」中土人ノ領スル地ヲ
全ク日本ニ併ハセ来ル千八百七十五年一月一
日迄ニハ皇帝陛下最上委員及ヒ其輔佐ヨリノ
新年祝賀ノ書ト共ニ右併合ノ報告ヲ得給テ可
シ
予ハ前文ニ外國士官ノ給料ニ付テノ予カ説
述ヘシカ予此諸「シ」ノ心添テ結尾トシテ日本人
ヲ用フルニ付テノ箇條ヲ申述フ可シ抑ハ此回
ノ遠征ハ日本人ノ為メニハ必ス若干ノ艱難ヲ

生ス可キカ故ニ出陣中ハ澤山ニ手當ヲ与フ可
ク又功ヲ奏シタル後ハ其褒賞ヲ与フ可シ總テ
此回目論ム所ノ如キ遠征ヲ為スニ付キ其最モ
多分ノ費アルハ士卒ニ相当ノ給料ヲ与フルニ
ハ因テス其遠征ニ管係セシ人ノ徃々私利ヲ營
ムニ出テ、若シ士官等澤山ノ給料ヲ得テ猶其
勤務ニ怠リ或ハ其職分ヲ尽クサス或ハ官金ヲ
私シ或ハ其他何事ニ限ラズ不正ノ費置ヲ為シ
テ官ノ司庫ニ損害ヲ掛ケルノミニアラズ遠征
ノ成功モ之レカ為テ益キニ至ルコトアラハ府倉

方ク嚴ニ之ヲ罰スハニ
此亦一ノ予思
許スル大
理ニ~~也~~ハル現ニニテ既ニ唇経前同新原文ニ漢
字ヲ記シ有之候間別ニ
誤シ不~~レ~~候誤者謹白

日本政府ニ於テ右一事ノ重要ナルト前文ニ
述ハタル諸事トシ綿密ニ熟考アラハ予敢テ遠
征ノ成功ヲ疑ハサル所ナリ
謹呈之

千八百七十四年三月十三日

東京ニ於ニ
チャールズ、ウ、レシヤンドル

大隈参議閣下

